

Title	福沢百助著 『果育堂詩稿』 (三)
Sub Title	The translation and notes of Koikudo (A collection of poems written by Hyakusuke Fukuzawa) (III)
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro) 『福翁自伝』を読む会("Fukuo jiden" o yomu kai)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.1 (1982. 6) ,p.129- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820600-0129">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820600-0129</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢百助著『杲育堂詩稿』(三)

佐藤一郎 訳注

『福翁自伝』を読む会 補注

文政壬午(文政五年、一八二二、三十一歳)

(作品26) 夏日即事

夏日即事

南園久不燃吟髭 南園久しく吟髭を燃らず

過了海棠無一詩 海棠を過了するも一の詩なし

石火光中春已去 石火光中に春已に去り

青く梅子接牆垂 青青たる梅子牆に接して垂る

雲淡風清近午天 雲淡く風清く午天に近し

朝來無事曲耽眠 朝來事なく耽を曲げて眠る(貧家↓朝來)

一庭美蔭十分好 一庭の美蔭十分に好し

臥聽松梢断続蟬 臥して聴く松梢断続の蟬

福沢百助著『杲育堂詩稿』(三)

雨足初収又雨聲 雨足初めて収まるも又雨声

南軒一日幾陰晴 南軒一日幾たびか陰晴す

滿庭綠樹深く暗 滿庭の綠樹深深として暗きも

獨有榴花照眼明 獨り榴花ありて眼明を照らす

語釈 即事 眼前の事物を即興的にうたった詩。

吟髭 詩人のひげ。ひげを撚りながら詩想を練ったので、このようにいう。

過了 過ぎ去る。中国俗語系統の表現にもある。

海棠 カイドウ。桜(染井吉野)にやゝ遅れて桃色の小さな五弁花をたくさん咲かせるバラ科の灌木。中国原産。

石火光中 ごく短い時間のたとえ。

梅子 梅の実。

美蔭 美しい木蔭。

南軒 閑居を樂しむは南面した部屋。

榴花 柘榴、ザクロの花。これも中国趣味の庭木。中国人は子孫繁栄を象徴する木として喜ぶ。

眼明 眼が明かなこと。その人は作者自身か。柘榴の実からの連想が働いていよう。

補説 今日に残る中津藩下級武士の居住地区である金谷あたりを歩いて、それぞれかなりの面積を持つ一戸建住宅であ

り、庭樹も多く、特に狭いという感じはしない。詩のなかの描写は当時の実景であり、百助はこの住みなれた家(留

主居町、今日の福沢記念館の向いにあった)での忙中の閑を心静かに味わっている。ことに最後の二句には、新婚の

喜びが言外に匂っている。

すなわち『福沢手帳』25号の拙稿「福沢先生御両親の結婚の年月」の考証のように、文政五年四月に中津藩下士橋

本浜右衛門の長女阿順あじゆんと結婚した。これは文政七年の（作品55）「賦新婚別、奉呈丸岡君仲堅」（新婚の別れを賦し、丸岡君仲堅に奉呈す）の五言古詩中で「四月、郎が家に嫁するも未だ身を托するの安きを知らず 十月、郎遠く去るも 未だ離別の難を知らず 郎去りて帰日なく 風雨に蕙草残る 蕙草何ぞ老い易き 指を屈かりて潜かに永歎す 三歳空閨の裏 二冬ごかん互寒ごかんに泣く」と詠じていることにより証明されるのである。（丸岡仲堅、中津藩大坂留守居）第一句によって結婚は四月であり、第三句によって大坂への赴任は十月であることが分る。ただし（作品29）の詞書により、出発したのは十一月かと思われる。詩であるから表現の制約上、十月となったのであろう。第九句はそれから足掛け三年妻を故郷に残して経過したことを意味し、第十句の二冬は文政五年と六年の冬を指している。

結婚のとき、阿順は数えの十九歳であった。百助にこの春一詩なかったのも道理、多年勉学に励んできた彼に遅い新婚のときが廻まわってきたのである。

（作品27） 九日遊天仲寺、分韻得品字

九日、天仲寺に遊び、韻を分ちて品字がんを得たり。

山門隣海冷松杉

山門海に隣りて松杉冷かなり

苔徑秋深日初啣

苔徑秋深くして日初めて啣くむ

境静竹間窺宿鳥

境静かに竹間に宿鳥を窺うかがい

堂高樹抄望征帆

堂高く樹抄に征帆を望む

東籬無俗妨幽賞

東籬に俗の幽賞を妨ぐるなく

南畝有年方載芟

南畝に年の載さい芟せんを方ならぶるあり

偏喜外平免飢渴

偏ひとえに喜ぶ外平たいらかにして飢渴まぬがを免れ

佳辰把酒對岑岳

佳辰酒を把とりて岑しん岳がんに對むかうを

語釈 天仲寺 同寺は中津郊外、補説参照。

岳 巖に同じ。頼山陽の梁川星巖あて書簡に、星岳に作ること多し。〔頼山陽書翰集〕民友社刊〕

岨 銜こしに同じ。

載芟 芟は草を刈ること、載芟は堆肥作りのため、刈った草を積みあげてあるのであろう。

岑岳 高峻なる岩。

短評 静寂境での平和なる風雅の遊び。海沿いの寺にての詩会は、友人が集い酒宴を開く慣しの重陽の日に催された。折  
りから実りの秋、重陽節は中国伝来の登高の日でもある。

補説 三浦梅園『東遊草』にいう、「ことし寛延三年庚午はからずも東遊の興を催して……(二月)十三日、中津よりは  
ね木六里半。日すでに出たれば友どち中津の町へ出ける。売酒壚にやすみ寺町を見、甥などもおなじく来りてけるを  
引連、爰かして知音などとひてはりまやのあるじを尋れば、酒よ肴ともてなし、ひとりの男をそへて天仲寺へ案内を  
しける。」

すなわち天仲寺は、中津郊外の著名なる清遊の地である。

(作品28) 田園雜興

田園雜興でんえんざつぎやう

散步腰鎌非服田 散步の腰鎌は服田ふくでんに非ず

苦吟くぎん拱手てま似参禅 苦吟手を拱こまねけば参禅に似たり

庭莎ていさ漸掃しんぼう十弓地 庭莎漸はらく掃う十弓の地

籬菊まき方開まさ九月天 籬菊方まさに開く九月の天

禄米貧無ていぶつ底物 禄米貧しくては底物ていぶつに応うるなし

裳衣典設杖頭錢

裳衣典しては杖頭に錢を設く

帰来一醉南軒下

帰来一醉す南軒の下

坐見西山月上弦

坐まをろに見る西山の月上弦なるを

其二

板屋通宵聞雨聲

板屋通宵雨声を聞く

紅霞欲曉報新晴

紅霞し暁ならんと欲て新晴を報ず

疎籬試問花消息

疎籬試みに問う花の消息

古井窺看水濁清

古井窺い看る水の濁清

林樹風寒鴉来起

林樹風寒くして鴉起き来る

茗炉灰冷火初生

茗炉灰冷たくして火初めて生ず

朝暾漸掃秩桑上

朝暾漸く掃く秩桑かたわらの上

独立窓前眼亦明

独立窓前に立てば眼も亦明かなり

語釈 散歩 散策。補説参照。

服田 耕作に従うこと。

拱手 供は拱の誤りであろう。

莎 椶櫚に似る木。

弓 弓矢の距離では六尺を一弓とし、土地の長さを量るときには八尺を一弓という。

底物 江南地方の俗語で「何物」という意味。もと何等物からはじまるという。

典 質のこと。

設杖頭錢 杖の先に質屋で得た錢を入れた財布をくくりつける。杖頭錢は酒を買う錢。晉の阮脩の外出のとき常に杖頭に百錢を掛け、酒店に至れば買って酒をたのしんだ故事にはじまる。

霄 天上、あめ、宵と音通。ここでは宵の意に用いる。

朝暾 朝まだき。

秩桑 桑の枝を積んであるのだろうか。

補説○「其二」はあるが、「其一」の標示は草稿にない。

○日本では十八世紀後半の漢詩壇より、郊外散歩の時多くあらわれる。(田中道雄『朝日新聞』「研究ノート」欄、昭和五十四年八月八日)

また百助の師万里の「歩至下鴨祠」すなわち「十里長堤鴨水浜、土膏微潤不生塵、野店幾群浮白客、羅裳一帶踏青人」は散歩の名詩である。

一海知義著の『続漢詩の散歩道』に、唐の韋応物、宋の陸游の「散歩」の語句を含む詩の紹介あり。

(作品29) 壬午三月、弟茂徳于役于東武、道登象頭山、謁金毘羅祠。十一月、予亦命之浪華邸、道同登象頭山。

壬午三月、弟茂徳役に東武に于き、道象頭山に登り、金毘羅の祠に謁せり。十一月、予も亦浪華邸に之くを命ぜられ、道同じく象頭山に登れり。

青春茂徳謁神廟 青春茂徳 神廟に謁し

我亦玄冬登象頭 我も亦玄冬 象頭に登る

非是君恩及卑賤 是れ君恩 卑賤に及ぶに非ざれば

何由千里得同遊 何ぞ千里由り同じく遊ぶを得ん

語釈 茂徳 『文選』卷二十陸士衡「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」に、「茂徳淵冲天姿玉裕」(茂徳淵のごと沖ふ

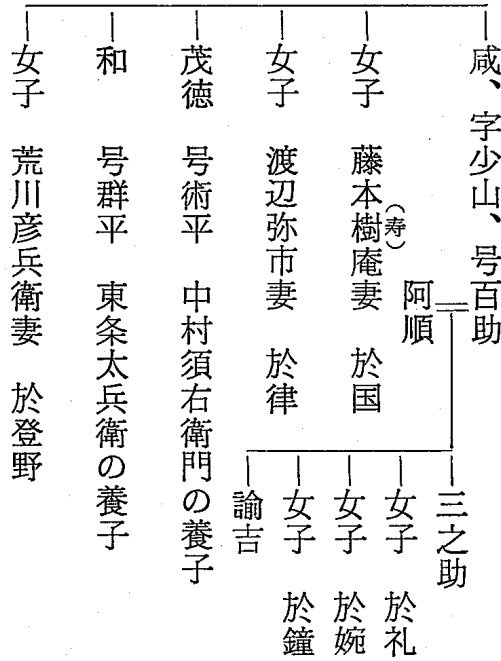
か) く……」とあり。

千里 実数ではない。はるかかなたよりの意。

補説 『福沢全集』所収の系図には、「同五年壬午九月御廻米方大坂在番」とあり、この詩の詞書と二ヶ月のずれがある。

河北展生氏いう、発令と出發とのずれか。

○『全集』系図によれば、百助は六人兄弟で、次の通りである。



○のちに次男諭吉は、幼時その叔父中村茂徳号は術平の養子となり、中村姓を名乗ったが実際には福沢家でほかの兄弟とともに起居していた。

(作品30)

小松寺有一松樹、伝云内府重盛公所手栽、有感賦一絶

寺在備  
国朝津

小松寺に一松樹あり、伝えて云う、内府重盛公手栽せる所なりと。感あり一絶を賦す。

寺は備国  
朝津に在り

小松寺裡一株松 小松寺裡一株の松



老幹蒼々欲化龍 老幹蒼々として龍に化せんと欲す

想見當年内府徳 想見す当年内府の徳

後凋千歳仰厳冬 凋しほむおぐに後おぐれしこと千歳厳冬に仰ぐ

語釈 内府重盛 内大臣平重盛の純忠の記述は、頼山陽の『日本外史』卷之一に詳しい。欲忠則不孝、欲孝則不忠、重盛進退窮於此矣。

靱津 同地は江戸時代から明治初年まで、瀬戸内海航路の重要港として栄えた。

後凋 歳寒然後知松柏之後凋也（『論語』）を踏える。

補説 文化文政年間、ようやく漢詩文の間に日本歴史上の史実を多く詠ずる風が盛んとなる。

○海路大坂へ単身赴任の途中、靱津へ寄港して詠んだ詩であろう。当時は帆船が主力であるから、順風を得るまで各地の港に寄港した。

文政癸未（文政六年、一八二三、三十二歳）

（作品31） 題画梅

画梅に題す

水墨描來筆入神 水墨描き来りて筆神しんに入る

清香占断一枝春 清香占断す一枝の春

氷肌別有高操在 氷肌別べつしては高操たうそうの在るあり

不学軟紅蒙市塵 軟紅なんこうの市塵しちんを蒙こうむるを学ばず

語釈 題画 画賛、画に詩文を作って書入れること。とくに山水画では、詩文と一体として鑑賞される。

一枝春 陸凱の范蔚宗あて、江南より梅花一枝を寄せた詩に、「聊贈一枝春」とあり。（『淵鑑類函』卷十三）

氷肌 白梅を指す。

軟紅 紅梅を指す。

**短評** 百助には梅花を詠んだ作品が多い。自分の信念を梅花に託しており、思想詩の性格が強い。しかし、第二句の「一枝春」が利いていて、詩本来の抒情性を損っていない。

これは他人の持参した梅の絵に、画賛したものである。自分の画に「筆入神」という表現は、もちろん不適當である。大坂時代、その周辺に風雅のグループ、あるいは役目上の交際での同好の交流があったことを物語っている。拙稿「臼杵図書館蔵福沢先生遺籍解題初稿」（『史学』第四十九卷第二・三号）所収の「福沢一八号帆足万里」肄業余稿」表紙四に竹の絵の書入れがあり、百助自身も多少は絵の心得もあったと思われる。

### 現代語訳

水墨の筆か入神の枝

清香にて占む一枝の春

氷肌の白花は高操のしるし

市塵にまみれる軟紅と縁なし

### 補説

百助は以降大坂の蔵屋敷に釘づけにたり、大坂商人との交渉に活躍して藩政の担当者に手腕を認められ、ついに心中深く期していた学問の道から遠ざからざるを得ない運命に陥いる。その背景を語る篠藤光行氏（『藩社会の研究』ミネルヴァ書房所収）の「中津藩の藩政改革と城下町商業の危機を通じてみた封建構造の崩壊過程」より必要箇所を引用しておきたい。「化政期における危機の深化……当藩における商業資本との妥協の時期は化政期であるということができよう。その現われを商業の面に求めれば、次の二つをあげることができる。

一つは藩内商人強要策から、藩外豪商依存体制への転換であり、いま一つは献金授格令による封建身分の安売りで

ある。

第四表は大阪商人よりの借入高を示すものであるが、そのなかから藩借金政策に次のような諸特徴をみいだすことができる。

- (一) 化政期以後借入高が激増していること。
- (二) 二・三派商人からの小額借入より、次第に少数の豪商への依存度を深めていること。
- (三) 中でも豪商廣岡久右衛門（加嶋屋）への依存度は異常に激増しており、金一三九五両と銀二五一貫六二五匁に達していること。……」

○当時の大坂の学界および文壇について。

天囚西村時彦著『懷徳堂考』（懷徳堂記念会）の「懷徳堂年譜」文化十四年（丁丑）二月十五日履軒卒す寿八十六私に諡して文清先生という。以下文政六年（癸未）九月十五日中井桐園和泉町中井氏に生る。まで記事なし。

○履軒の後、学問所預より教授を兼ねたるは、蕉園の弟抑楼なり。抑楼身を持する厳正にして家を御する勤儉なり。外にありては町奉行平賀貞愛に説き、一忠臣を表し、一奸臣を黜け、内にありては懷徳堂の用度を充足し、数多の凶籍を収蓄し、庫中の大櫃十二箇には備餼糧と題して米穀を貯蔵せし程なりき。抑楼の経術詩文必ずしも父叔を辱めず、然れども父叔の盛名一世を掩へるが為に、其後を継ぐ者異常の大才あるに非ずんば、退いて家学を恪守し、既成の業を保持するに如くは莫し。彼が自ら標置して、四方俗儒と交遊せざりし所却て其苦心を見るべきなり。懷徳堂 彙録

当時京都には頼山陽あり、大阪には篠崎小竹

疆、字承綱、通称長左衛門

あり。山陽の父春水と小竹の義父三島とが、混沌社友とし

て交甚だ厚かりしが如く、山陽と小竹とも亦頗る親善にして、両子を中心とせる京阪の文壇には、詩酒徵逐盛に行れたり。……凡そ文政天保に於ける篠門は、天明寛政に於ける懷徳堂と其繁栄を同じうし、彼は経義を専にし、此は詩文を主としたるの差あるのみ。（『大阪市史』第二P 403とP 404）

○中津藩邸のある大坂玉江橋北詰附近には、かつて混沌社の同人葛子琴（一七三九—一七八四）の屋敷があり、同邸には百助が若い頃遊学の志を抱いていた神辺の菅茶山も安永九年（一七八〇）に訪れている。（富士川英郎『菅茶山』筑摩昭和56年4月）

（作品32） 浪華竹枝詞

浪華竹枝詞

夜來春漲綠於藍 夜來春漲りて藍より緑なり

雨後青山凝翠嵐 雨後の青山翠嵐に凝る

報道桃花暖如是 報道す桃花暖かなること是くの如くんば

天王寺畔十開三 天王寺畔十に三は開かん

小舟如織緑波中 小舟織るが如し緑波の中

去く來く西又東 去去來來す西又東

兩岸垂楊春日午 兩岸の垂楊春日の午

千條揺動麴塵風 千條揺動す麴塵の風に

満市黄塵人未だ回らず 満市黄塵人未だ回らず

垂楊風定夕陽催 垂楊風定まれど夕陽催す

晴川何處笙歌沸 晴川何れの処よりか笙歌沸き

橋畔方舟載妓來 橋畔の方舟妓を載せて來る

日暖風輕燕語檣 日暖かに風輕く燕語の檣

橋頭新綠柳絲長 橋頭の<sub>ニ</sub>新綠柳絲長し

紅樓二八能留客 紅樓二八能く客を留め

不使行人憶故郷 行人をして故郷を憶わ使めず

不識新來客是誰 識らず新來の客は是れ誰ぞ

含情長袖上樓遲 情を含みて長袖樓に上ること遲し

西肥東奧語音熟 西肥東奧語音熟し

才惠揣摩如舊知 才<sub>きと</sub>惠く揣摩<sub>しま</sub>して旧知の如し

巧把琴心織手彈 巧みに琴心を把りて織手もて彈く

媚人更倚玉欄干 人に媚び更に倚<sub>よ</sub>る玉の欄干

春風面暖樓頭月 春風面に暖かなり樓頭の月

不解深閨獨夜看 解せず深閨に独り夜看るを

載妓舟く疾若梭 妓を載せる舟舟疾きこと梭<sub>さ</sub>の若し

晴川此處月明多 晴川此處より月明多し

月明偏照花妖女 月明<sub>ひと</sub>偏えに照す花妖の女

巧唱憐夫廣島歌 巧みに憐夫<sub>ひと</sub>廣島の歌を唱う

浪華橋上夜如何 浪華橋上夜如何ん

南岸吹笙北醉歌 南岸に吹笙し北に醉歌す

但恨鴛鴦未暖 但だ恨む鴛鴦未だ暖かならず

無情落月没金波 無情の落月金波に没するを

語釈 竹枝詞 楽府の一体・男女の情事や土地の風俗などを詠じ、中唐の劉禹錫（柳宗元・白居易の詩文の友）にはじまるといふ。

緑於藍 『荀子』勸学篇「学不可已、青出于藍、而青于藍」を踏えてやゝ文字を変えている。

報道 告げ知らせる。

麴塵 こうぢのかび。転じて青に黄を加えたこうぢ色。麴塵絲は、黄緑色の若芽をつけた柳の枝。

晴川 雨あがりの川面。

紅楼二八 青楼は青塗りの建物から転じて妓楼を、紅楼も貴人の朱塗りの家から転じて妓楼、料理屋を意味するよになつた。

二八は十六歳、若い妓女、歌姫。

西肥東奥語音 西は肥前肥後、東は奥州。大坂から遠くはなれた地方の「語音」（ことばと音、ここでは方言）にも。

揣摩 それと察する、推量する。

梭 枉に同じ。機織のとき緯（よこいと）を送る。

浪華橋 すなわち難波橋。今日の難波橋は中之島を横切るが、江戸期の中之島は上流が百メートルほど短く、下流より難波橋、天神橋、天満橋の三橋を公儀橋といった。文化十年癸酉正月刊の大坂古地図では、三橋とも中之島

の上手にある。

但恨鴛鴦衾未暖 单身赴任の孤閨をかこつ氣持。

**短評** 竹枝詞のような当時の漢詩壇で流行のジャンルをも無難にこなして、大坂での商人や蔵役人との新しい社交の場にも適応力を発揮している。

**補説** 「文化十三年（一八一六）刊の『鴨東四時雜詞』は、当時流行の竹枝体の産物で、我が国では祇園南海の『江南詞』によって、その体の開拓がはじまったのであるが、菊池五山が『深川竹枝』を発表するに及んで、続々と模倣者が現われた。棕隱のこの著は京都の風物を唱った最初のもものと言ってもいいだろうが、非常な歓迎を受け、一時に彼の名を高からしめた」

（中村真一郎『頼山陽とその時代』P 222 中央公論社 昭和46年6月）

○中島棕隱（一七八〇～一八五六）京都の文人、村瀬栲亭に師事す。

○山陽先生鑿聞『清百家絶句』一卷尾城（名古屋）書肆東壁堂文化乙亥孟冬新鐫にも、施愚山の「西湖竹枝」、李武曾の「呉興竹枝」、黄莘田の「西湖竹枝」「虜邱竹枝」、楊守次の「西湖竹枝」、彭駿孫の「嶺南竹枝」、徐伯調の「鏡湖竹枝」、嚴蓀友の「湖上竹枝詞」を収め、この風がやはり清朝詩壇から伝わったことを示唆する。

○武士にとって大坂町人は手ごわき交渉相手であった。竹枝詞を作りながらも、心労は絶えなかったことだろう。山片播桃『稽古談』第三冊にいう、「金銀カリカシノコハ、先祖代々ノ金カシ也、金ヲカシテソレヲ業ニシテオル男ドモ也、生レオチヨリ金銀カシカリノコニノミ心ヲユタネテオル男也、日本国中ノ武士ノ腹中ヲハ、朝カラ晩マテアツコフテアルコナレバヨフナレテオリテ、中々武士ナソニタマサレテ金ヲカシ、武士ノ弁舌ニノリテ損ヲスルナト、云フコハ、ユメサラ、ナキコ也」

**福沢一族交遊関係** 時の中津藩大坂留守居は供番ともばんの丸岡実秀である。仲堅と号す。文政二年七月より文政年間を通じて、

同人である。天保元年正月帰国。文政二年八月家族呼寄せ。その実弟正則（猪飼家へ養子）は、文政九年帰国まで留守居助役であった。（河北展生「福沢百助の大坂在番と中津藩士」〔『福沢論吉年鑑』7〕参照。

（作品33） 桃谷

桃谷

半發桃花氣力柔

半ば発さく桃花氣力柔かし

恰如兒女笑含羞

恰あたも兒女の笑がいて含羞がするが如し

任他一路狂風起

任他さもあらばあれ 一路に狂風の起らば

十里紅雲凝不流

十里の紅雲凝りて流れざらんや

遙看處女到瑤台

遙かに看みる処女の瑤台に到りて

妬殺仙桃嬌半開

仙桃を妬殺して嬌として半ば開くを

安識箇中千万樹

安ぞ識こちゆらん箇中千万の樹の

花神也化美人来

花神も也また美人に化して来らん

語釈

桃谷 「今日では縁とは縁が少ないといわれる大阪にも、かつてはいろいろと自然景観があり、花鳥風月が楽しめ

た。桃では桃山・天王寺産湯・稲田村が知られ、特に桃山は桃谷とも称し、見渡す限り桃樹がっらなってい

た。」（宮本又次『大阪文化史論』所収 P.245 文献出版）

また天保六年刊の『摂津大絵図』浪華播磨屋九兵衛刊を案ずるに、「御城」のほば南、真田山の西隣に桃谷、

モモ谷の地名がある。桃谷の南は寺町に隣接している。現在、大阪環状線に「桃谷」駅あり。『福翁自伝』にも緒

方塾時代の話に「ころは三月桃の花の時節で、大阪の城の東に桃山という所があって、盛りだというから花見に



行こうと相談ができた」とある。ただし後者の桃山は前者と違うことが河北展生氏の調査により判明した。すなわち前述宮本氏の記載にある稲田村は、現東大阪市に属し、大坂城の真東四・五軒、心斎橋より約七軒の所にあり、稲田桃として桃の名産地であり、楠根川に舟を浮べて花見の宴が張られたと『中河内郡史』<sup>P502</sup>に記してあり生駒山人(河内国の豪農で儒者森又は日下部文雄、徳川中期の人)の稲田桃をよんだ詩も記されて居り徳川時代よりの桃花の名所である。距離はやゝ近いが、方角も一致して居るので諭吉の遊んだ桃山は稲田の桃林とみて誤りなからう。

仙桃 仙人桃におなじ。桃の一種、また桃の木をいう。中国では古く桃に邪気をはらう働きを認めていた。箇中 花の心をよく知る人という程の意味。

十里紅雲 中国の童謡に「正月梅花香又香、二月蘭花盆裏装、三月桃花紅十里」とある。(藤野岩友『中国の文学と礼俗』所収「中国の民俗文芸」角川書店)

補説 百助には四季おりおりの花を詠じた詩が多い。しかし最も日本的な花である桜を詠じた作品がほとんどなく、中国的な梅とか桃がもっぱら対象になっている点は注目される。花に象徴される中国趣味か。和習に陥るのを避けたのか。

(作品34) 春日

しゅん じつ  
春日

詩思多緒不成章 詩思は緒多きも章を成さず

鈎上疎簾對夕陽 鈎もて疎簾を上げて夕陽に対す

一陣狂風何處起 一陣の狂風何処よりか起り

隔牆吹送百花香 牆を隔てて吹き送る百花の香

孤枕寒窓細雨斜 孤枕寒窓細雨斜なり

蕭然環堵似僧家 蕭然たる環堵は僧家に似たり

東君不若予無事 東君も若かず予の無事なるに

開遍桃花又李花 開くこと遍ねし桃花又た李花

語釈 緒 いとぐち

狂風 にわかに吹きおこる風

孤枕寒窓細雨 孤といい、寒といい、細といい、すべて寒色系。

環堵 まわりを取囲むかきね。「環堵蕭然」狭き家のさびしきさま。環堵蕭然、不<sub>レ</sub>蔽<sub>二</sub>風日<sub>一</sub>。(陶淵明「五柳先生伝」)

僧家 僧侶。

東君 春の神、太陽の神。

東君不若……第四句は東君の働きを指す。第三句と第四句で、桃花や李花を遍く咲かせてはいるけれども、予の無事なるに及ばない。

### 短評

連作の前詩は晴の日の夕景であり、後詩は春雨の降る夜の状況であって、もとより一日の光景ではない。作者は中津藩蔵屋敷の自室にいて、花の香に、こぬか雨に、わが無事の日々を見つめている。愛する妻も傍にいないのであるから、よけい僧家のようなおもむきが強まろう。

### 現代語釈

うた心 浮ぶかと見えて形なく

傾く太陽をまじまじと看る

ふと 涌き起るは風

垣根越しの花ばなの香り

ひとり寝の窓辺の雨は

音もなく斜めに降る

隠者めいて寂しいが太平無事

あの春の神の境遇よりよほどましと思いたい

補説

中津藩大坂蔵屋敷の図が『福沢手帳』第二号表紙3にある。堂島の往還に面して表門、福島側に裏門、表門側に御留守居、御用人長屋、御家老長屋、裏門側に元々方小吟味長屋、西側及び中央に米倉、中央に中津藩御殿(役所)が設けられている。同図で東隣は延岡藩蔵屋敷であるが、西隣は明記していない。文政四年官許、同八年発兌の浪華書林播磨屋版の「文政新改摂州大阪全図」によれば、西隣は富山藩である。

○蔵屋敷「其数は天保時代には百十一、維新前には九十八を算し、大抵船着の便利なる場所に位置を占めた。即ち中之島に最も多く集中し、堂島・天満・土佐堀・江戸堀等が之に次いだ」(大阪市役所編『明治・大正大阪市史』第一巻 P183 三、蔵屋敷)

○その遺構としては、天王寺公園内の市立美術館南門として、中之島の旧黒田藩蔵屋敷源蔵門がある。

(作品35) 次居易上人見寄韻

居易上人の韻を寄せ見るに次す

杖履飄然西又東 杖履飄然たり西又た東

暫留衣鉢扇城中 暫く衣鉢を留む扇城の中

無涯苦海人間世 涯なき苦海人間の世

時。慈航濟不通放。 時に慈航を放ちて通ぜざるを濟う (放を二字目に補入)

夢醒蝴蝶粉翅翻 夢醒れば蝴蝶粉翅翻たり

小院時繡道德篇 小院時に繡く道德の篇

一縷香煙一庭雨 一縷の香煙一庭の雨

祇林新緑入窓鮮 祇林の新緑窓に入りて鮮かなり

語釈 次韻 他人の詩の韻字と同一の韻字を用いて作詩すること。ここでは上平声一東の韻。東・中・通。下平声一先の

韻。篇・鮮。

杖屨 杖と麻で造ったはきもの、杖とくつ。

扇城 前出、中津城のこと。

祇林 祇は穀物のみのりそめる。

福沢一族交遊関係 居易上人は『仏教事典』『豊前人物誌』等に見えず不詳、百助の交遊関係に、中津とも縁故のある僧

侶が含まれていることは注意される。諸国を行脚する僧侶である。慈航は観音の名でもある。

(作品36) 二月念日寄内

二月念日、内に寄す

破窓紅雨小樓春 破窓の紅雨小樓の春

井臼遙知定辛苦 井臼遙かに知る定めて辛苦するを

燈下今宵話農事 燈下今宵農事を語り

団欒不睡守庚申 団欒睡らず庚申を守らん

語釈 念日 二十日

内 妻、内人もやはり妻、ここでは阿順のこと。(明治七年五月七日没、寿七十)

紅雨 赤い花びらの散るさまの形容

井戸 井戸と曰と。水くみと米つきや製粉は、むかしの代表的な家事労働である。

話儂事 広瀬淡窓『遠思楼詩鈔』卷上、律詩「宿<sub>ニ</sub>関玄珪宅」の第七句、第八句に、「妻兒皆識字、炉畔話団欒」とあり。

守庚申 庚申待、かのえさるの日(年に普通六回ある)に行われる信仰行事。この日は睡らずに語り明かす習慣が

あった。中国の道教系統の俗信である。この日睡ると体内の三尸虫さんしちゆうが上帝に訴えて命を縮めるといふ迷信に基く。

短評 はじめて妻阿順がその詩に登場する。愛妻家であり、同時に故郷への思慕の情も深い。周辺の人びとへの情愛が人

並以上深いのが百助の詩の持味の一つである。

(作品37) 夢帰故山

夢に故山に帰る

帰来相對却無辭 歸り来りて相對すれば却かえつて辞ことばなし

笑指春園桃李枝 笑いて春園桃李の枝を指す

五夜鷄聲忽回夢 五夜鷄聲忽ちにして夢を回めぐらし

初驚身是客天涯 初めて驚く身は是こゝれ天涯に客たり

語釈 五夜 一夜を五分していう、戌夜(午前四時)

短評 これも望郷の詩、そして花は桃李である。

(作品38) 次間野新吾詠椎谷瀑布韻

間野新吾の椎谷瀑布を詠ずるの韻に次す

東西椎谷邃

東西椎谷は邃しおくよか

探勝鶯留連

勝を探りて留連を為す

翠壁穿雲裡

翠壁は雲裡に穿ちうが

銀河落日邊

銀河は日辺に落つ

迎風波緑水

風を迎えて緑水に波だち

激石雨晴天

石に激して晴天に雨ふる

不識奔流去

識らず奔流の去りて

岐成幾許川

岐わかれて幾許いくばくの川と成るかを

語釈 椎谷瀑布 「帆足先生文集」卷の一に「贈<sub>ニ</sub>椎谷村正」および「椎谷」の両詩あり。前詩にいう、

絶巘清流十里余 人家往往状<sub>ニ</sub>巢居<sub>一</sub>

料知箇裏饒<sub>ニ</sub>幽趣<sub>一</sub> 山可<sub>レ</sub>燒<sub>レ</sub>畚水可<sub>レ</sub>漁

短評 迎風波緑水 激石雨晴天の対句は妙。

福沢一族交遊関係 間野新吾は万里門の同門か。かつて椎谷に遊んだ時を追想しての唱和であろう。

(作品39) 即事

即事そくじ

間眠適意寓居中 間眠意に適<sub>ナ</sub>う寓居の中

無事無人慮亦空 無事無人慮おもいも亦た空

堪笑疎奴誤食性 笑うに堪えたり疎奴食性を誤り

烹魚摘入雁来紅 魚を煮るに摘みて入る雁来紅

語釈 無人 人気がない。

疎奴 下僕、あるいは炊事人。

雁来紅 ひしの異名、はげいとうの異名。この詩では山椒や唐芥子と、類似のものとも錯覚して煮魚に加えたか。蔵屋敷の一隅に雁来紅が植っていたものとみえる。

短評 忙中閑あり、日常の細事を描くのは当時の風潮。中津は周防灘に沿った藩であり、大坂は瀬戸内海を控えた鮮魚には不自由しない土地柄であるから、当然魚が多く食膳にのぼったことであろう。炊事人に対する要求もこまかかったに違いない。魚市場雑喉場はこの頃玉江橋の西南にあった。（『大阪繁昌詩』中）

（作品40） 中秋泛舟于玉江橋下

中秋、舟を玉江橋の下に泛ぶ

江頭細雨洗輕塵 江頭の細雨輕塵を洗う

半夜雲収月色新 半夜雲収りて月色新たなり

清影忽思藏酒婦 清影忽ちに思ふ酒を蔵えるの婦

良宵時促泛舟人 良宵時に促す舟を泛べるの人

一川流水留明鏡 一川の流水明鏡を留め

兩岸秋風動綠蘋 兩岸の秋風綠蘋を動かす

殷卜陰晴杲得吉 殷に陰晴を卜すれば杲として吉を得たり

須當廢睡達鷄晨 須く當に睡を廢して鷄晨に達すべし

語釈 玉江橋 淀川は中之島を挟んで北側を堂島川、南側を土佐堀川という。玉江橋は中之島の西端より約三分の一の距

離の堂島川にかかる。現在も玉江橋を渡って中之島に入ると、住友病院、国際貿易センターの裏あたりに、旧幕時代のおもかげが僅かに残っている。

中津藩蔵屋敷は、いまでは阪大病院となっており、その堂島川側の入口に「福沢諭吉生誕之地」の碑がある。

田中右馬三郎著『大阪繁昌詩』（紀律堂〔幕末刊〕）にいう、

雨霽玉江橋上風 侯家粉壁水西東

南方直望荒陵塔 長在頼翁詩句中

蔵酒 酒を貯蔵する。又、その酒、『史記』「大宛伝」富人蔵酒至万余石

緑蘋 緑の浮草。

杲 ここでも杲の字を使用、すなわち『杲育堂詩稿』の杲の字である。

### 短評

中秋の明月に蔵屋敷から至近の堂島川に舟を浮べて月見の宴を張った時の作。夕刻からの細雨に兩岸に連なる黒門や武者窓、米蔵、白海鼠塀の諸藩の蔵屋敷もひとときわ鮮やかに半夜雲も消えて漫々と水をたたえる大川に明鏡のような満月。百助は易学の素養を生かして、晴夜がつづくかどうか占い、吉と出たのであろう。

### 補説

一般に蔵役人には相当の交際費、機密費がそれぞれの藩より交付されていたものと思われる。すなわち、宮本又次『京阪と江戸』（青蛙房 昭和49年9月）にいう、

P114 …「大阪は町人の都であるが、新町も北の新地も蔵屋敷出入によって盛んになったものだ。だからお振舞が盛んであったわけだ」

P213 …「大阪の遊里では蔵屋敷の蔵役人くらいで、武家の遊客は少なかった。もちろん蔵役人のお振舞も盛んで、いわゆるお振舞芸者の羽振りは大したものだった。紋付裾模様、持物、髪飾り物も一代の華美をきそい、一度お振舞に出た芸奴は大威張りで、小さな所へは、いかなかった」



○蔵屋敷の研究には、黒羽兵治郎「加賀藩の蔵屋敷制度」「加賀藩蔵屋敷勤役仕法」「筑後蔵の出米延滞事件」「加賀蔵米の大阪御為登仕法」(『近世の大阪』所収有斐閣 昭和18年11月)

宮本又次編『大阪の研究』(蔵屋敷の研究・鴻池家の研究)4清文堂 昭和45年1月

同書の第一部は、蔵屋敷の研究で、「近世初期の大阪における米穀流通」「大阪の蔵屋敷と蔵元および掛屋」「大阪の蔵屋敷と名代」「大阪の蔵屋敷と御館入」「加賀藩蔵屋敷払米制度に関する史料紹介」となっており、附録の三に、「元禄末大坂大名蔵屋敷・名代・蔵元・銀掛屋」がある。

(昭和五十六年十二月十八日)

### 追記及補正・増注

『果育堂詩稿』(一)及び(二)について、宇野精一東京大学名誉教授・藤野岩友国学院大学名誉教授の詳細なる補正および増注を得た。ここに全文を掲げて謝意を表したい。

○宇野精一氏いう。『果育堂詩稿』一「一〇八頁三行不易得、得易カラズと訓読すべきもの。四行骨立垢面と訓読すべきもの。骨立は療せて骨と皮になること。六行訓読の「鍛う」は「きたうる」の誤植ならん。末行、又恨貧家之振郵の訓は疑問ですが「之」の字はどうも不自然で或いは「不」の誤かと推測しますがわかりません。「不」なら貧家ノ振郵セザルヲ恨ムとなり何やらわかるやうな気もします。一〇九頁六行、玄冬はどの注でせうか。一〇行、富田氏の脱落の疑は押韻を考へると、檻樓……の次、即ち初知……の句の前に脱落があることが疑はれます。一一〇頁一三行、坐春愁は春ノ深キニ坐スカ。一一一頁一七行、酒を携えるを待つは、酒ノ携フルヲ待つではないか。酒を携へて来るのを待つのか。一一五頁三行、何為……はナンスレゾと訓すべきか。四行、懸弧報ズルアリ、嗟歎スルナカレではないか。

五行、探り去ケ驪龍領下ノ珠ヲではないか。一一七頁三行、月桂、ここは桂花（即ち木犀の花）の意ではないか。桂花もよい香りですが、蘭もこれと伯仲たり難いといふのはどちらを伯とすることも難しい、の意でせうか。ですから瑤台とか月桂はその美称でせう。科挙の試験云々はここは無関係。一二〇頁終カラ二行、知天近は天ノ近キヲ知りと訓読したい。一二一頁一行、喜報……は喜ビテ報ズ懸弧男子ノ志と訓読するのではないか。一四行、我問津はやはり我津ヲ問フ、あるいは我津ヲ問ハンと訓読すべきではないか。百助と年齢の関係もあるが、百助よりは多少年長のやうですから我（百助）が森君に津を問ひたいといふことでせう。」

○藤野岩友氏いう。『果育堂詩稿』二「作品11」承句。秋風がふき鱸魚の句になるので、漁具の修理をする意。東哲の故事によれるか。（作品25）第7句鱸魚の句参看。結句。認めるあり↓認むるあり。（作品12）転結の句。黄鳥は春嚙り草蛩は秋鳴く。ともに芒種の風物に非ず。以て山中の下界と異なるをいう。（作品13）第6句。苦霧。盛んな霧。深い霧。鮑照「舞鶴賦」に見ゆ。『文選』六臣注、「幹曰、…殺レ物、故曰レ苦也。」（作品14）第三句蜻蜒洲（本文・直読文及語釈）↓蜻蜒洲。第13句。本文睿（古字）。第18句。桓武天皇平安遷都の詔中の「山河襟帯自然ノ城」の意。吉田松陰の「拝鳳闕」詩の冒頭にこの句あり。第19・20句。平安京の四神相應の地なることをいいたるなるべし。桓武天皇、延暦十三年十月、曩に地を相せしもの覆奏して曰く、「この地（山城国葛野郡宇多村）の体を見候ふに、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、四神相應の地なり。尤も帝都を定むるに足れりと申す。」（『平家物語』卷五、都遷）

○青（五行説ニテ東方ノ色）龍、白（五行説ニテ西方ノ色）虎、朱（五行説ニテ南方ノ色、||赤）雀（孔雀）、玄（五行説ニテ北方ノ色、||黒）武（玄武ハ蛇ト交メル亀）は天上星宿の名。これを四神という。その地東に流水（鴨川）あるを（左は南面していう。右も前・後も同じ。）青龍といい、西に大逆（山陰の道）あるを右白虎といい、南に沢畔（鳥羽の田地）あるを前朱雀といい、北に高山（比叡山）あるを玄武という。

○金鳥・玉兔といえるは、同じ思想に本づく、元旦朝賀の式に樹つる幢・旗のことを仮りていえるか。平安初期撰定

の「内裏儀式」元旦、受<sub>ニ</sub>群臣朝賀<sub>ニ</sub>式并会に、「当<sub>ニ</sub>殿<sub>ノ</sub>（大極殿）中階<sub>ノ</sub>南去十六丈<sub>一</sub>、樹<sub>ニ</sub>銅<sub>（赤色）</sub>鳥幢<sub>。東樹<sub>ニ</sub>日像幢<sub>。次青龍旗<sub>。次朱雀旗<sub>。銅鳥幢西樹<sub>ニ</sub>月像幢<sub>。次白虎旗<sub>。次玄武旗<sub>。同様ノ文、「儀式」卷六、「北山抄」卷三にも見ゆ。</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

第23句、九陌<sub>（本文・直読文及語釈）</sub>↓九陌。第26句、綿綿自七五<sub>（七五語釈に四十五代聖武天皇から百二十代仁孝天皇まで七十五代）、四十五代聖武天皇（現行年表四十五代。作者の当時にありては四十六代と見たるか）から百二十代仁孝天皇（現行年表百二十代。当時は百二十一代と見たるか）まで（<sub>現行</sub>）</sub>ともに数えて七十六代なれば、成数（周室八百年のごとく）をとりて七十五代とすべきに似たれども、聖武天皇は奈良朝の天子なれば聖武より数うるは非なり。平安朝第一代の桓武天皇（現行年表五十代。作者の当時は五十一代と数えしか。）より数うべきに似たり。桓武より仁孝まで七十一代なり。これも成数を挙げて七十五代とすべし。

○作者の考へたる列皇系譜はいかなるものなりしか。補説のごとく山陽の「日本外史」岩垣松苗の「国史略」などに本づきたるか。他に北畠親房の「神皇正統記」などもよく読まれたるごとし。林道春の「本朝通鑑」、徳川光圀の「大日本史」などは日常繙読の書に非ざるべし。前に現行年表と併挙げしたる列皇の代数は、山陽の子、頼復刊行の「日本政記」の神皇系譜に拠れるなり。「日本政記」は未完の書なれど、これを経とし「外史」を緯として皇国の史実を明かにするは山陽の本旨にして、これを承けて続成したるこの系譜は尤も山陽の意に愜<sub>かな</sub>うものなるべく、また作者の當時一般に考へられし皇統の系譜も、大凡かくのごときものならんと思わる。第35・36句。松陰は鳳闕を拝して「悲泣して行く能はず」と歌ひたるが、作者も亦王室の式微を憂うる情を存せしならん。たゞ顕わにこれをいうを憚り、婉曲にその意を抒べたるか。二句は九重の奥深く天子羽舞の楽音を耳にする能わざるを悲しむものと解すれば、寂寞たる夕まぐれの景と相俟って、無限の余情を生じ、一篇の結尾として洵に上乘のものと思わるゝが、いかゞにや。

（作品15）組局。金仙に奉ぜん<sub>（か）</sub>どちらかを入れる。語釈 泰、泰の俗字か？黒柳勲「俗字異字」三画ヲ二画ニ改メタルモノニ湊湊（俗）、奏姿（俗）、○羅振盞（羅振玉の兄）「碑別字」卷一奏姿也。（漢楊孟文頌）○新井白石「同文



送別の宴、離堂ともいう。第5句、素月苦む↓苦ゆ。李華の「弔ニ古戰場ニ文」に、「月色苦兮霜白」<sup>さえて</sup>。第6句、本文、銀漢倒流、李白の「觀ニ廬山瀑布ニ詩」に、「飛流直下三千尺、疑<sup>フ</sup>是<sup>レ</sup>銀河落<sup>ニ</sup>九天<sup>ニ</sup>」<sup>ツルカト</sup>。銀漢は銀河。あまの川。李白の直下の瀑布を銀河の天上より落つるかと思ひしを、山国川の急流に転用せるなり。第9句、非土。王粲の「登楼賦」に、「雖<sup>モ</sup>信美<sup>ニ</sup>而非<sup>ニ</sup>吾土<sup>ニ</sup>兮、曾何足<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>少<sup>ク</sup>留<sup>ル</sup>」<sup>ナリト</sup>。第11句、柔艫。柔艫(本文、直読文)柔艫の誤。艫は櫓に通ず。ろ。かい。柔艫は、静かに漕ぐ櫓。杜甫「船下夔州」詩に「柔艫輕鷗外」の語あり。第17句、直読文愁ひ絶つ↓愁絶す、と訓む。愁絶はうれへかなしむ。絶は極、きわまる。呉融「西陵夜居」詩に「尽夕成<sup>ニ</sup>一<sup>ツ</sup>」<sup>ス</sup>。李彰「阻<sup>ニ</sup>風雨<sup>ニ</sup>」詩に「行人客子<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>」<sup>ス</sup>。第22句、本文胷中、胷は胸の別体。第26句、語釈 斯文 信奉する道。学問。儒学ヲ加エル。

○前野直彬氏(東京大学名誉教授)いう、「(作品11)の「題画」の詩の最後の句は、「唯沙鷗の認め得て馴るる有るのみ」と読むべきです。この場合の認めるとは、覚えてするといった意味で、すなわちいつか没鷗だけが顔見知りで、なれなれしくしてくるといふ意味になります。」

○金谷 治氏(東北大学教授)いう、「五三頁(作品12)の現代語訳三句目は、まだとすると驚がしっくりしませんから、それを除いて「下界では」ぐらいになさったらという感じがしました。」

○富田正文氏。「(作品20)の「与誰同」の読みは、勿論あれでよいと存じますが、「誰と<sup>とも</sup>にせん」と読むと口調がなだらかだろうと存じます。(作品25)の第十七句の「人愁絶」の読みは、「人は愁絶す」と音よみにしては如何ですか。もしどうしても和訓にすれば、「愁<sup>きりま</sup>い絶<sup>ま</sup>る」とでもルビを振りたい存じます。」

○金文京氏いう、「(作品14)の最後の句は「安<sup>いずく</sup>干<sup>せん</sup>羽<sup>ぞかんろう</sup>の舞を聞かん」が正しく、于<sup>ゆ</sup>は干<sup>かん</sup>の誤りです。すなわち「書経」大禹謨に、「舞<sup>ハ</sup>干<sup>ハ</sup>羽<sup>ヲ</sup>于<sup>ニ</sup>兩<sup>ニ</sup>階<sup>ニ</sup>、七<sup>ニ</sup>句<sup>ヲ</sup>有<sup>ル</sup>苗<sup>ヲ</sup>格<sup>ス</sup>。」とある。